



Title	清華大学竹簡と先秦思想史研究
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2010, 50, p. 280-288
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61184">https://doi.org/10.18910/61184</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 清華大学竹簡と先秦思想史研究

湯浅邦弘

「あなた方が世界初の参観者です」。

二〇〇九年九月一日、我々は、外国人研究者として世界で初めて清華大学蔵戦国竹簡を实見した。

### 清華簡の発見と整理

時は、二〇〇八年の夏にさかのぼる。北京オリンピックの開催を目前としていた中国で、一つの事件が起こった。七月十五日、古物商が入手していた大量の竹簡を、清華大学の卒業生である実業家が購入し、母校に寄贈した。「清華簡」と略称された竹簡群は、第一次調査の結果、二千余枚からなる戦国時代の竹簡であることが判明する。近年公開され世界の注目を集めている竹簡の内、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）が約七〇〇枚、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）が一二〇〇枚。清華簡の分量はそれら

をはるかにしのぐ。

竹簡の一部はカビが生えるなど劣化が見られたため、清華大学では、ただちに専門の工作室を設けて洗浄と保護にあたった。オリンピックで世界が沸きかえる中、研究員は休日返上で作業に没頭した。

この作業が一段落した十月十四日、清華大学主催の竹簡鑑定会が行われ、中国国内の十一名の研究者が招かれた。古文字学研究の権威である裘錫圭氏をはじめ、出土文献研究に実績のある研究者たちが参加した。鑑定の結果、これらが間違いなく戦国時代の竹簡であるとの評価を得た。この段階で清華大学は、清華簡の概要をメディアに公表し、大きな反響を呼んだ。特に、『尚書』に該当するのではないかと推測される文献があること、『竹書紀年』に類似した編年体の史書があることなどが注目された。

その後、清華大学では、清華簡の撮影作業に着手。その過程で、竹簡の総数が二三八八枚（残簡を含む）であることも確認された。

十二月、清華大学の委託により、北京大学でC14年代測定が行われた。その結果、清華簡の年代が紀元前三〇五年±三〇年であることが判明し、先の鑑定結果を裏づけた。清華簡も、郭店楚簡や上博楚簡と同じく、戦国時代中期の竹簡であることが科学的に証明されたのである。

### 清華簡の公開と研究

二〇〇九年四月二十五日、清華大学では、正式に「出土文献研究与保护中心」（以下センターと略称）を設立し、センター長を務める李学勤教授が清華簡の概要と意義を説明した。李学勤氏は、その際、『保訓』と仮称された竹簡十一枚からなる文献を紹介した。ここには、「惟王五十年」から始まる文章が見られ、在位五十年を迎えた周の文王が子の太子発（武王）に遺訓する内容であることが明らかにされた。

ただ、清華簡の取り扱いについては、やや問題視する声も同時にあがった。なぜなら、センターは清華簡の写真版を公開しないまま、釈文の一部を、言わば小出しに

したからである。その結果、釈文だけに基づく考察がインターネット上に登場し、さらにその考察に対する批判が掲載されるという状況に至った。釈文の一人歩きが始まったのである。

これは、いち早く内容の一部を紹介したいというセンターの善意に基づくものであったと思われるが、実物を見ることのできない内外の研究者は、センターが紹介した釈文を前提に議論せざるを得なかった。実物や写真を公開するのかもしれないのか。清華大学の姿勢が問われたのである。しかし、郭店楚簡の場合、発見されてから正式な公開まで五年、上博楚簡も七年後によく公開が始まった。それを考えれば、清華簡の一部が入手の翌年に早くも紹介されたこと自体、大いに評価しなければならぬであろう。『保訓』の写真（計十一枚の竹簡）とセンターによる釈文が正式に公開されたのは、『文物』二〇〇九年第六期の誌上である。ただ、清華簡の実物が公開されないという現実に変わりはなかった。

そこで、我々は、二〇〇九年七月、センターに連絡をとり、李学勤氏との面談、および清華簡の実見を希望する旨を伝えた。これは、筆者が代表者になって日本学術振興会に申請していた共同研究「戦国楚簡と先秦思想史の総合的研究」が平成二十一年度〜平成二十五年度の科

学研究・基盤研究（B）に採択されたのを受けたものである。幸いセンターからは好意的な回答があり、我々は八月三十日、北京入りした。メンバーは、筆者のほか、浅野裕一（東北大学教授）、福田哲之（島根大学教授）、竹田健二（島根大学教授）、福田一也（大阪教育大学非常勤講師）、草野友子（日本学術振興会特別研究員・京都産業大学非常勤講師）の計六名。我々は、九月一日午前十時、胸躍らせてセンターに赴いたのである。

### 清華簡の実見

まず清華簡が收藏されている部屋に招かれた。警備員が配置されている。空調がきいているためか、やや肌寒い。センターの劉国忠、趙桂芳、沈建華研究員の立ち会いの下、ふたの外された四つのトレーをのぞき込む。部屋全体で、トレーは七十。我々が実見を許されたのは第六十六〜六十九番の四つのトレーであった。トレーはそれぞれ透明のガラスケースで覆われている。竹簡收藏の様子は次の通りである。

第六十六番トレー 竹簡番号二二七二〜二二九一

竹簡枚数二十



第六十七番トレー 竹簡番号二二九二〜二三一八

竹簡枚数二十七

第六十八番トレー 竹簡番号二三一九〜二三三五

竹簡枚数十七

第六十九番トレー 竹簡番号二三三六〜二三六〇

竹簡枚数二十五

（但し、第六十九番トレーは、保存状態を示すため、竹簡背面を展示している。そのため文字は記されていない、いわゆる白簡の状態であった。）

竹簡は、一枚ずつ細長いガラス板に乗せられ、白い紐で固定されて、トレーの中に整然と配置されていた。全体は少し黒っぽい文字は鮮明に見える。字体は、郭店楚簡や上博楚簡で見られた楚系文字に類似している。簡長は、短い残簡を除けば、おおむね三十 cm 台と四十 cm 台。竹簡の両端は平斉で、円形や梯形のものはない。比較的に栄えのよい竹簡が並べられていたのかどうか分らないが、張家山漢簡のように湾曲した竹簡は見あたらず、保存状態はよいとの印象を受けた。

トレー内の竹簡は、一種類の文献ではなかった。たとえば、第六十六番トレーには「一」（陽）と「八」（陰）で構成された卦画が見えることから、『周易』関係の文献であると推測された。また、第六十八番トレーには、他



の竹簡とは異なる幅広の竹簡も二本収められていた。他の竹簡の幅が一 cm に満たないのに対して、これら二本は一、五 cm 程度もある。ここには、一本の竹簡に文字が二行にわたって

記されており、しかも、文字と文字の間に赤い横線が引かれている。明らかに図表形式の竹簡である。さらに、年代や国名が記された史書らしき文献も見られた。

こうして竹簡を凝視し続けていた我々に、劉国忠氏がささやいたのが、冒頭のことばである。「世界初」という事実には、身の震えるような思いがこみ上げてきた。

人はあまりに熱中すると時間の感覚を失う。我々も、時を忘れて竹簡を眺め続けた。わずか数分の出来事のようにも思えたが、時計を見るとすでに三十分が経過していた。

#### 清華簡研究の展望

別室に移り、李学勤氏と面会した。竹簡実見に立ち会った三氏のほか、李均明研究員も加わって、会談が始まった（注し）。

まず李学勤氏から、清華大学創立百周年にあたる二〇一一年に清華簡の刊行が分冊形式で始まるとの説明があった。竹簡枚数一二〇〇枚からなる上博楚簡は全十分冊（別冊を含む）の予定で刊行が続けられている。二〇〇〇枚を越える清華簡は、はたして何分冊となるのか。

続いて、質疑応答に入った。この過程で注目されたの

は、次のような諸点である。まず、清華簡を「楚簡」と呼ばないのは、全体の精査を終えていないので、慎重を期してのことだそうである。我々が実見した竹簡は確かに楚系文字で記されていたが、七十もあるトレイの中には、そうとは断定できないものもあるのではあるうか。また、そもそも近年発見された竹簡は、「楚簡」とは呼ばれているものの、他の地域、たとえば齊・魯・三晋などの戦国竹簡は見つかっていない。とすれば、出土地が判明している郭店楚簡はともかくとして、清華簡を「楚簡」と称して良いのかについては、現時点では即断できないという慎重な意識も働いているのであろう。

次に、郭店楚簡・上博楚簡・清華簡の筆写時期の問題について、センターでは、科学測定（前記の同位炭素測定）、文字、内容の三点から、ほぼ同時期と考えているとのことであった。戦国中期の筆写であるとすれば、文献の成立は当然それよりさかのぼる。戦国時代、あるいは春秋時代の文献である可能性も想定される。

また、これまでの出土文献では、墓主との関係が注目されている。たとえば、睡虎地秦墓竹簡は秦の法律関係文書であったため、墓主は法吏と考えられ、銀雀山漢墓竹簡は兵書が大半を占めていたので、軍事関係者が墓主であったと推測されている。この清華簡はどうであろう



か。全容は公開されていないものの、センターの発表によれば、その内容は、『尚書』の一部と推測される文献、『竹書紀年』に類似する編年体の史書、『国語』に類似した楚の史書、『周易』に関係する文献、『儀礼』に類似する文献、音楽関係の文献、陰陽月令に関する文献、馬王堆漢墓帛書『相馬経』に類似する文献などである。このことから、墓主は史官である可能性も考えられるとのことである。

最後に、筆者から、李学勤氏の論考を翻訳し、大阪大学中国学会の『中国研究集刊』に掲載したい旨を伝え、了承を得た。これは、『文物』二〇〇九年第六期に掲載された同氏の論考を想定したものであったが、『中国史

研究』二〇〇九年第三期掲載予定の論考にその後の最新情報を盛り込んであるので、あわせて紹介してほしいとの要請があった。日本では、まだ清華簡の情報が決定的に不足している。センターの代表者である李学勤氏の正式な論考を日本語に翻訳して学術誌に掲載することには一定の意義がある。

約一時間の会談を終え、全員で会食した後、我々は清華大学を後にした。二〇一一年に公開が始まるという清華簡。郭店楚簡、上博楚簡に続く第三の戦国竹簡は、先秦思想史を劇的に塗り替えて行くことであろう。

なお、この会談の設定については、以前から我々と親交のある人民大学の刁小龍氏（清華大学出身）の御高配を得た。刁氏には通訳の補助も務めていただいた。会談がきわめてスムーズに進行したのも、刁氏のおかげである。

### 復旦大学の挑戦

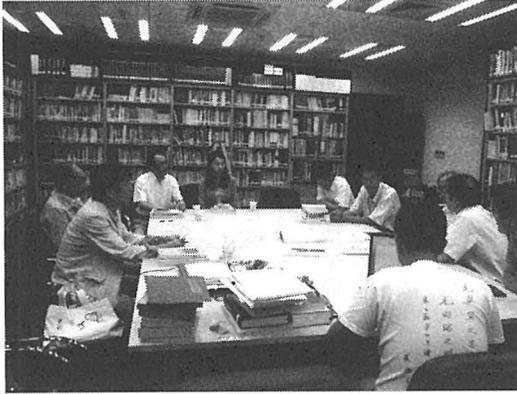
北京に二日滞在した後、我々は、九月三日、上海へ移動した。復旦大学を訪問するためである。ここには、二〇〇五年に設立された出土文献与古文字研究中心（以下、研究センターと略称）がある。この研究センターは、近

年の出土文献研究の一大拠点になりつつある。

これまで、楚簡研究を主導してきたのは、湖北省の武漢大学であった。次々と国際学会を開催し、我々研究会メンバーも、二〇〇六年六月の「新出楚簡国際学術研究会」に招かれ、研究発表を行ったことがある。また、武漢大学簡帛中心は、インターネット上に「簡帛網」(<http://www.bsm.org.cn/index.php>)を開設し、新たな研究発表の場を提供した。たとえば、上博楚簡の分冊が刊行されると、ただちにこの「簡帛網」に連日数本ずつの論考が掲載されるという活況を呈したのである。ネットの世界は、武漢大学の一人勝ちであった。

だが、そこに有力な対抗馬として登場したのが、この研究センターである。特に、上博楚簡第七分冊が刊行されると、ただちに復旦読書会が組織され、研究センターのホームページ(<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Default.asp>)に次々と論考が掲載され始めた。これまで武漢大学の「簡帛網」だけを頼っていた他の研究者たちも、このホームページを無視できなくなった。我々が今回、北京の清華大学に続いて、上海の復旦大学を訪問したのは、こうした理由からである。

約束の六時半に研究センターに到着。主任の劉釗教授、施謝捷教授、周波講師、廣瀬薫雄講師との会談が始まっ



た(注2)。会談は夕食をはさんで夜九時半まで続いた。夕食後には裘錫圭教授も加わり、議論に熱が入った。

この会談で注目されたのは、次のような諸点である。まず、研究センターの主要プロジェクトは、大きく分けて古文字学研究と敦煌研究の二つがあり、前者については三つの仕事と同時に並行で進められているとの情報である。

第一は馬王堆漢墓帛書の研究。これは、湖南省博物館

との提携により、馬王堆漢墓帛書を全面的に見直すプロジェクトである。そのため、帛書の写真をすべて撮り直したそうである。我々が拝見した写真は、既刊の文物出版社版よりはるかに鮮明で、これにより釈読の見直しが進むと期待される。中華書局からの刊行が予定されてい

るといふ。第二は上博楚簡の研究。第一分冊から第六分冊までを対象とした「字詞」を五年計画で編集し、刊行することのである。第三は、戦国時代の文字分析。これは、裘錫圭教授の最も得意とする分野である。十名のスタッフが研究に専念し、これら複数のプロジェクトを推進しているのである。

次に、やや意外だったのは、上海博物館との関係である。我々研究会メンバーは二〇〇七年夏に上海博物館を訪問し、濮茅左氏と会談した。席上、上博楚簡の刊行が当初六分冊で終了するはずであったのが九分冊となり、続いて断簡を集めた別冊が刊行されること、また、これらとは別に、上海博物館が入手している戦国楚簡の字書(濮茅左氏は「字析」と命名)が刊行されること、などの情報を得た(注3)。ところが、この字書については、裘錫圭氏をはじめ研究センター側は詳細を把握しておらず、むしろ、我々の方から情報を提供するという有様であった。同じ上海市内にありながら、積極的な学術交流がなされていない印象を受けた。

また、清華簡について興味深い情報があった。古物商から竹簡を買い上げた経緯については、詳細が明らかにされており、購入価格についてもいろいろな噂が飛び交っている。研究センターの得ている情報としては、一

簡八〇〇人民元で買い上げたという。これが事実であるとすれば、約二千枚として計百六十万円。日本円に換算して約二千三百万円となる。真相は未詳であるが、ともかく、清華簡の購入には、相当の金額がすぎ込まれたようである。

最後に、研究センター側から、我々研究会メンバーと今後積極的な研究交流を継続したいとの要望があった。

これに応える形で、メンバーの浅野教授が、かねて刁小龍氏に中国語の翻訳を依頼していた論考を、研究センターのホームページに提供する旨、約束して、会談は終了した(注4)。

### 出土文献研究の展開

短期間の内に出土文献研究の二大拠点を訪問し、それぞれのセンターを率いる二人の権威との会談が実現した。

清華大学は新たな戦国竹簡を獲得したとの自信に溢れている。これから数十年、「清華簡」学は、中国古代思想史研究の重要テーマとして君臨し続けるであろう。また、一挙に十名ものスタッフを集めて研究センターを設立した復旦大学も、夜九時半を過ぎて研究室の光は煌々とついたらままであった。出土文献研究の牽引役となることは

間違ひなからう。

先秦思想史の研究は、郭店楚簡、上博楚簡に続く清華簡の発見によって、また新たな局面を迎えようとしている。

### 注

(1) 我々研究会からは、会談の冒頭、以下の書籍を贈呈した。

・『竹簡が語る古代中国思想(二)——上博楚簡研究——』(浅野裕一編、汲古書院、二〇〇八年九月)

・『上博楚簡研究』(湯浅邦弘編、汲古書院、二〇〇七年五月)

・『古代思想史と郭店楚簡』(浅野裕一編、汲古書院、二〇〇五年十一月)

・『竹簡が語る古代中国思想——上博楚簡研究——』(浅野裕一編、汲古書院、汲古選書、二〇〇五年四月)

・『諸子百家(再発見)』(浅野裕一・湯浅邦弘編、岩波書店、二〇〇四年八月)

・『上博楚簡與先秦思想』(浅野裕一著、台湾・万卷楼、二〇〇八年九月)

・『戦国楚簡與秦簡之思想史研究』(湯浅邦弘著、台湾・万卷楼、二〇〇六年六月)

・『戦国楚簡研究二〇〇七』(『中国研究集刊』第四十五号、二

〇〇七年十二月)

(2) 我々研究会からは、会談の冒頭、注(1)前掲の書籍を贈呈した。また、研究センター側から以下の書籍の寄贈があった。

・『出土文献与古文字研究』第一輯(復旦大学出土文献与古文字研究中心編、復旦大学出版社、二〇〇六年十二月)

・同・第二輯(二〇〇八年八月)

・『復旦学報』(社会科学版)二〇〇九年第一期

・『復旦大学出土文献与古文字研究中心通訊』第一期(二〇〇七年十二月)

・同・第二期(二〇〇八年十二月)

(3) この詳細については、戦国楚簡研究会「上海博物館藏戦国楚簡「字書」に関する情報」(『中国研究集刊』第四十三号、二〇〇七年六月)参照。

(4) 我々の訪問の概要は、二〇〇九年九月六日付けで、研究センターHPに紹介された。また、浅野裕一「上博楚簡《東大王泊阜》之災異思想」(九月十三日付)、同「上博楚簡《凡物流形》之整體結構」(九月十五日付)に続いて、草野友子「關於上博楚簡《武王踐阼》中誤寫的可能性」(九月二十二日付)が同HPに掲載された。

[附記]

本研究は、平成二十一年度科学研究費補助金基盤研究(B)「戦国楚簡と先秦思想史の総合的研究」(研究代表者・湯浅邦弘)による成果の一部である。